

プロジェクト概要

プロジェクト名

(和) ナカラ回廊農業開発研究・技術移転能力向上プロジェクト

対象国名

モザンビーク

署名日 (実施合意)

2011年2月21日

プロジェクトサイト

ナンブラ州ナンブラ市/ニアサ州リシंगा市

実施期間

2011年4月1日から2016年3月31日

相手国機関名

(和) 農業省農業研究機構

(英) Agricultural Investigation Institute of Mozambique

背景

モザンビーク (以下「モ」国) の農業部門は GNP の約 27%、総輸出額の約 10% を占め、労働人口の約 80% が従事している。一方、「モ」国で農耕可能とされている国土面積は 3,600 万ヘクタールであるが、このうち実際に耕作されている面積は約 16% の 570 万ヘクタールに過ぎないとみられている。特に同国北部に広がる熱帯サバンナ地域は、一定の雨量と広大な面積を有する農耕可能地に恵まれており、農業生産拡大のポテンシャルは高いと考えられている。しかしながら、同地域でも多くは未開墾地である。更に小規模農家の農業技術は伝統的なものに限られており、その多くは粗放的であり、自給作物、商業作物ともに生産性は高くない。また、中・大規模農家であっても用いられている農業技術は限定的であり生産性は高いものではない。そのため、今後適正な農業技術の導入 や資本投資により、耕作面積の拡大と農業生産性の向上が期待されている。

当該地域にはモザンビーク農業研究所 (Mozambique National Institute of Agronomic Research : 以下 IIAM) 傘下の 2 つの地域農業試験場 (ナンブラ及びリシंगा) があり、農業研究を行っているものの、施設は貧弱かつ研究者の能力も十分でないため、地域に適した農業技術の開発が遅れており、農業生産性の向上に貢献できていない。

かつて「モ」国と同様に広大な未開墾の熱帯サバンナ地帯を有していたブラジルは、1970 年代から我が国と農業開発協力 (セラード開発) に取り組み、いまやセラードは大農業生産地帯へと発展した。その知見や農業技術を日本と連携して熱帯サバンナが分布するアフリカ諸国に移転し、そして日本とブラジルは農業開発支援を行うことを検討してきた。今般「モ」国は比較的安定した政治状況にあること、また前述の「モ」国北部熱帯サバンナに高い農業ポテンシャルがあることなどから、日本・ブラジルの三角協力による農業開発の支援対象国として「モ」国が選定された。

こうした状況を受けて、現地の情報収集と今後の協力の方向性について 2009 年 9 月から 2010 年 3 月にかけて行った協力準備調査「日本・ブラジル・モザンビーク三角協力による熱帯サバンナ農業開発プログラム準備調査」では、「ブラジルセラード開発の知見は、モザンビークサバンナ農業の生産性向上に活用できるものの、社会経済環境は大きく異なっていることから、ナカラ回廊周辺地域の農業開発を現実的に実現するためには、先、農家が適正な作物体系を選択する際に活用できる「農業開発モデル」を確立することが有効である」ことが明らかになった。その「農業開発モデル」の構築のためには、「試験研究の成果の蓄積」と「実証プロジェクトの先行」が有効であり、その端緒として前述の地域農業試験場の研究能力向上及びパイロット農家での新しい農業技術の実証展示を実施することが提唱され、係る内容に基づき、「モ」国が本プロジェクトを要請するに至った。

本業務は、上記要請に基づき、ブラジル政府が派遣する研究者とともに、「モ」国側研究者の能力向上と技術移転能力の向上を目指すものである。

*下線は NGO による

*引用サイト : <http://www.jica.go.jp/project/mozambique/001/outline/index.html>